

## 神奈川県立がんセンター臨床研究所 ～現場力とネットワークによるがん研究の促進～

神奈川県立がんセンター臨床研究所長・高野康雄  
 神奈川県立がんセンター臨床研究所がん予防・情報学部長・岡本直幸  
 神奈川県立がんセンター臨床研究所総括部長・宮城洋平

神奈川県立がんセンターに付置された臨床研究所では先駆的な研究と事業に取り組んでいる。県内外の大学・企業をネットワークしたその取り組みは、がんをめぐる研究・開発のイノベーションを促進している。

### ▶がん専門の研究所として大学や企業をネットワーク

**高野・臨床研究所長** 臨床研究所はがん専門の研究所です。がんの基礎医学的研究から、診断・治療に直結する研究、疫学まで幅広く展開しています。病院の臨床医との共同研究を行い、成果は臨床にフィードバックされます。全国の大学、研究所、企業との共同研究も行っています。

**岡本・がん予防・情報学部長** 神奈川がん臨床研究・情報機構（以下、「機構」）は平成18年に設立されました。現在、県内4大学（北里大学、聖マリアンナ医科大学、東海大学、横浜市立大学）、東京大学医科学研究所、慶應義塾大学、名古屋大学、浜松医科大学、滋賀医科大学、（独）理化学研究所、製薬会社など37団体が参加しています。機構で、がん患者さんへの情報提供を促進する「がん情報センター事業」とともに柱となっているのが、「腫瘍組織センター事業」です。

### ▶医師主導の治験で早期の創薬を

**宮城・総括部長** 新薬が認可されるまでには多段階のステップがあり、時間がかかりますが、「医師主導の治験」によりスピードアップを図りたいという問題意識から、腫瘍センター事業をスタートさせました。患者さんの同意を得て提供を受けた腫瘍組織や血清等（試料）を、機構に参加している大学・企業の研究に審査を経て提供します。22年度までに凍結組織、パラフィンブロック、血液合わせて約6000件の試料を収集し、約2400件の提供を行いました。機構の試料は患者さんのご協力や医療チームの貢献もあって9割方がんセンターからになっていますが、がん研究の発展を支えています。6年前から先駆的に始めました

が、現在では他県や韓国のように量・質とも充実したバイオバンクも出てきました。高度の研究には試料のクオリティが重要です。手術の際、試料を整えて速やかに冷凍保存するための人員を割くなど、もう少しコストをかけた取り組みができればと思います。

### ▶がん予防・早期治療、そして創薬分野へも

**岡本** 受診率を上げる新しいがん検診の開発を考えていた際、アミノ酸分析の活用を検討していた味の素の研究所に協力することになり、機構から血液提供を行ってきました。味の素のアミノインデックス技術による検査は昨年から実用化されましたが、フォローアップが必要です。がん治療の前後で血中アミノ酸の変化を調べるなど、多くの検体と時間が必要となる研究も行っています。

**宮城** 動物で、がんによるアミノ酸の変化を調べる研究も行っています。

**高野** 現在の研究所は15名という小世帯ですが、有能な人材を集め、県立がんセンターの治療の「現場」と患者さんのご協力というメリットを生かし、今後は創薬にも力を入れたいと思っています。すでに大学や理化学研究所・味の素などと共同研究を行っていますが、大きな製薬会社との共同研究も視野に、スケールメリットが必要となる手前のニッチの部分の研究に取り組んでいきたいと考えています。



宮城洋平氏

高野康雄氏

岡本直幸氏